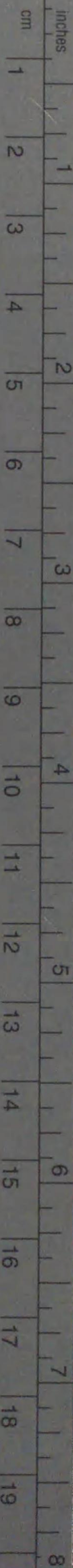


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

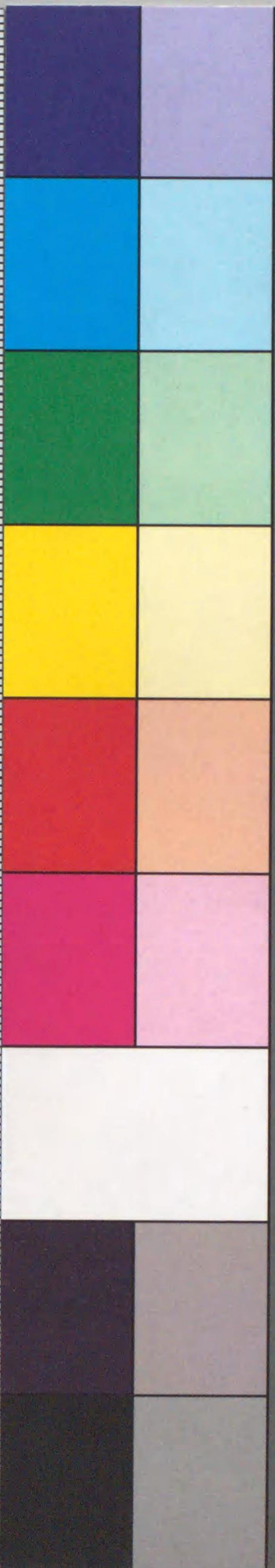
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



澄懷堂書畫目錄

卷十

728.2  
Y363t  
11





澄懷堂書畫目錄卷十

二峯 山本悌二郎纂

包世臣草行書詩軸

高六尺四寸六分

闊一尺六寸八分

紙本

七絶一首。曰はく

五月榴花照眼明。枝閒時見子初成。可憐此地無車馬。顛倒青苔落絳英。

季子屬

包世臣書

安吳包伯子又第十五、包世臣字慎伯、我書意造本無法の三印を鈴せり。

清朝の中葉、碑帖金石の學大に起りてより以來。書道も亦前人の蹊畦を脱離して、別に新生面を開けり。其の著名なる者を擧ぐれば劉墉、鄧石如、包世臣、趙之謙等の名家即ち是なり。此の幅の如き當さに此の變遷を語るものと謂ふべし。





### 改琦巖洞佛像橫幀

高九寸七分

闊一尺四寸六分

紙本

巖洞の前、芭蕉の傍、袖手趺坐の佛を寫せり。描線圓勁にして、傳彩沈厚、禪味の油然たるを覺ゆ。左方に精楷を以て「聖清道光二年龍集壬午夏四月望、那伽定生改琦寫」と款識し、改琦畫印の一印を鈐せり。藏印二方あり。改琦は乾隆三十九年に生れ、道光九年齡五十六歳を以て歿せり。故に此の幀は其の四十九歳の作たるを知るべし。

改琦の畫佛は古人の幽微を抉して、別に一種跌宕の致を具ふ。此の幀は李龍眠の筆を以て、陳老蓮の意を寫せるに似たり。高致の及ぶべからざるものあるを覺ゆ。

### 改琦梅窓美人圖立軸

高二尺七寸五分

闊一尺三寸五分

絹本

深窓の美人、帷を掲げて窓外の梅花を觀る。眼は梅花に在らざるが如し。知

らず意の在る所果して如何。上方に左の一詩を題せり。

夢裡尋香出曉城。一聲寒角夢魂驚。美人不作羅浮夢。獨倚梅花待月明。

「玉壺外史改琦」に署款し、壺史の一印を鈐せり。

改琦は能く美人を畫くを以て名あり。都中の貴人、改琦の美人圖を得て瑰寶よりも珍とし、百金を以てするも片楮に易ゆるを肯んぜざる者ありき。此の幅は特に清豔絶倫、加ふるに詩の凄婉を以てす。此の畫に對して此の詩を誦する時、六尺の丈夫亦消魂の思に堪へざらん。改琦は名重くして畫少く、偽物疊出せり。然れども改琦の長を擅にせる所は、神韻高致に在り。觀者之を以て目標とせば鑑裁を謬るなからん。

### 改琦水墨竹石圖立軸

高二尺六寸一分

闊八寸五分

紙本

匆匆揮灑し來りて風致超妙。所謂南田の韻に兼ねるに冬心の逸を以てせるものなり。改琦に此の筆あり、即ち工細豔麗を以て改琦の能事了れり。爲すの非なるを知る。「七癖」に款署し、改伯韞の印を鈐せり。



### 瞿應紹梅竹雙幅

各 幀 高四尺二寸六分 闊一尺

紙 本

應紹の畫は改琦より入手し、惲壽平を宗せり。晚年鐵舟和尚に心折し、墨竹は特に其の妙を極む。此の屏幅、一は梅花を畫き一は竹石を寫せり。

梅に題して、曰はく

吾家窗外耐寒枝。曾學司空細品詩。

余曾做司空表聖品詩、作花品品梅、錢十蘭先生爲署齊、曰二十六花品廬

今日爲君圖小幅。

草堂月落雪消時。

子冶瞿應紹

墨竹に題して、曰はく

初種綠君得連宵陰雨、曉窓下黛痕欲滴、輒移筆妍、就之 子冶

印章は一は子冶、一は瞿子を鈐せり。應紹の書は其の畫と同じく惲壽平より出で、清婉の致を極む。

### 湯貽汾菡廬問字圖立軸

高三尺六寸一分 闊一尺一分 紙 本

江岸菡蘆叢生せる處。一茅屋あり。屋内一婦人机に對し、前に一童を立たしめて課讀の狀を爲す。淡設色の山水なり。幅の上方に「時乙丑冬至後二日于聽香館、爲韻山先生、寫菡廬問字圖、雨生弟貽汾」を款識し、龍山琴隱、貽汾、雨生詩畫の三印を鈐せり。

貽汾は乾隆四十三年に生れ、咸豐二年節に殉せり。此の圖を畫ける乙丑は嘉慶十年にして、貽汾齡二十八歳に當る。即ち其の早年の作なり。而かも字畫既に老熟、晩年の作に異ならず。所謂る大器晩成は貽汾に於いて其の當らざるを見る。

裱綾上に王曇、郭饗、陳鴻壽、梁章鉅等、凡て十五名家の題詩あり。皆嘉慶十一年丙寅より咸豐七年丁巳に至れる間の作にして、韻山先生の爲に此の圖に題せるものなり。韻山は王文誥なり。

### 湯貽汾田舎樂圖立軸

高四尺四分 闊一尺七寸六分 紙 本

兀山の下、老松の邊、一茅屋を寫せり。屋内兒女あり、屋外訪客あり。設色淡雅にして、意趣閒



逸。田園鼓腹の景。畫き得て妙なり。七言絶句二首を題せり。曰はく

倉盈屋補息勞筋。婦子熙熙一室春。一樣光陰田舍好。不知世有別離人。

瓦盆翻倒會新春。短褐長裾共率真。一樣光陰田舍好。不知世有折腰人。

道光癸卯祀竈日、武進湯貽汾作於白門琴隱園、并題

款下に湯貽汾印、雨生詩畫の二印を鈐せり。癸卯は道光二十三年にして貽汾六十六歳なり。

此の幅は上海龐氏の舊藏に係り、虚齋名畫録之を載録せり。

貽汾の山水は、思致疎秀を以て勝る。閒々境界細碎して、渾淪古厚の氣無きを諳るものある

も、是れ其の率爾應酬の作に就いて云へるのみ。經意の作に在りては、大家の面目、卓然とし

て具はる。是れ其の四王の後繼として人皆之を許す所以なり。

### 湯貽汾竹外數峯圖立軸

高二尺二寸一分 闊九寸八分

紙本

設色の小景山水なり。自ら題して、曰はく

上皇山石、八十一穴、皴瘦透秀、克兼四絶、寶晉百夫、琴隱一筆、填滄海之未能、更補天而乏

術、然則與瓦礫其奚別

戊申秋日白門大水、弊居遂成晶宮、坐臥一小閣、終日無俚、唯弄翰遣興、顧庭前竹木、日見其

槁、歸然尙存者、竹外數峯、一時意之至、爲寫照、競々焉日有顛朴之憂矣、貽汾記

貽汾、粥翁歸隱後作の二印を鈐せり。戊申は道光二十八年にして、貽汾七十一歳なり。

### 湯貽汾大樹高山圖立軸

高四尺一寸一分 闊一尺二分

金箋

水墨を以て高峯を寫し、下に設色の虬松丹楓を畫けり。「生平寫大樹、未嘗作高山、今試爲之、

非法也、貽汾」此款識し、粥翁の一印を鈐せり。即ち晩年の作なり。

秦祖永は貽汾の畫樹を評して云はく「閒々蒼松古柏を寫すに縱横恣肆、墨氣淋漓。頗る能く

古に入る」と。宛も此の幅を評隲せるに似たり。

### 湯貽汾嘲雪圖卷

高一尺二分

長三尺五寸八分

紙本



雪中山居の圖なり。赤簫先生の爲に畫く所にして、題して「嘲雪圖」と云ふ。上に七言古體一首を題し、嘉慶己卯暮春雨生湯貽汾識於靈岳官舎」と款識せり。塞翁、雨生詩畫、毘陵湯貽汾雨生氏章、湯貽汾印の四印を鈐せり。己卯は嘉慶二十四年にして、貽汾四十二歳なり。

雪景を畫くは古來畫家の難事とする所なり。黃鶴山樵は曾て冬景山水を畫いて意未だ滿つる能はず。之を壁間に掛け白粉を弓絃に塗抹して畫面に彈き、初めて雪中江山の眞趣を得たるを喜べりと云ふ。王維、范寬を外にして、歴代の大家も筆を此に染むる者多からざるは是が爲なり。今此の卷を見るに筆致疎秀にして、溪壑凍冷の趣、夏尙肌に粟を生ぜしむ。卷頭に倪錫湛、高邕の題字あり。跋紙に陸葆、張維屏及び赤簫先生各一跋を録せり。

### 湯貽汾做漁山吟秋山淨圖卷

高六寸三分

長七尺七寸

紙本

圖は吳漁山の秋山圖の臨本にして、淡彩山水なり。紅樹落木、白雲飛泉、具さに秋山蕭疎の致を極む。卷尾に題して、曰はく

荒荒澹澹秋樹煙。元季之人遊戲焉。毫間欲斷意不斷。使我追擬心茫然。

畫就展觀、而湖山佳處放意如深入也、康熙甲申年重陽日墨井道人併題

道光甲辰長至後二日湯貽汾臨

款下に老雨の印を鈐せり。甲辰は嘉慶二十四年にして、貽汾の六十七歳に當る。

吾齋收むる所の貽汾の畫は挂軸多きに居る。今此の卷を展ぶれば筆情暢叙。萬里を咫尺に覽るの概あり。漁山の原本は未だ見るに及ばざるも、蓋し多く之に過ぐる能はざるべし。貽汾が清朝六大家の一に數へらるゝ所以は特に此の卷子に於いて之を知る。

### 湯貽汾山水畫冊

高八寸八分

闊九寸七分

紙本

計十頁

淡彩の小景山水なり。思致疎秀、筆意簡淡。每頁系くに詩を以てせり。皆「貽汾」署款し、湯貽汾印、雨生、貽汾、雨生詩畫、粥翁歸隱後作の諸印を鈐せり。第十頁に「道光己酉夏六月武進湯貽汾作于琴隱園」と款識せり。即ち道光二十九年の作にして、貽汾時に四十七歳なり。題詩の一を左に録す。

結茅立林麓。無事出門稀。彈琴向流水。松花吹滿衣。



亦有知音人。閒來尋翠微。囊琴漉美酒。醉看青山飛。

女史董婉貞古柏圖立軸

高三尺五寸

闊一尺二寸六分

紙本

老柏一株、下に奇石靈草を配せり。渴筆を用ゐ、淡彩を施し、筆致古勁、女流柔媚の習を脱盡せり。小楷の題贊あり、曰はく

千霜得拱、百仞方枝、露滋將潤、風動先知、捎雲清漢、倒景華池、

庚子立秋做南田草衣本

毘陵董婉貞

婉姑、湯夫人の二印を鈐せり。

夫人は湯貽汾の室にして、湯祿名の母たり。湯氏二門、皆文雅を以て聞ゆ。夫人亦染翰に工にして、蓉湖女史の名は夙に藝林に高し。而かも其の筆蹟は流播多からず尤も惜愛すべし。

女史董婉貞花卉蟲魚冊

高九寸三分

闊一尺七分

紙本

計二十葉

細筆濃彩を以て花卉禽鳥蟲魚を寫せり。前の十二葉は元人を撫し、後の八葉は惲壽平に倣へり。合して二十葉、女史が梁佩蘭の爲めに寫せるものなり。二次左の如し。

第一款 道光丙申長夏撫元人筆意爲佩蘭仁姊屬、蓉湖董婉貞寫於白門保緒園

第二款 長夏無事、偶塗花卉十二幀、佩蘭見之、愛不釋手、其明日屬臨甌香館本、再寫八紙、

俾與前作合成巨冊云、雙湖又誌

婉貞、雙湖女史、蓉湖之印、九芝仙館等の印を鈐せり。搗叔審定の一印あり。趙之謙の鑑印なるが如し。

湯貽汾の書畫は尙獲べし。夫人の畫は容易に見るべからず、尤も珍惜に値す。

湯祿名梅花仕女圖立軸

高四尺四分

闊一尺三寸九分

紙本

祿名は花石禽魚、能くせざる無きも、尤も長を人物に擅にせり。此の幅を見るに仕女は清秀雅妍、梅花は脂粉の中に尙仙氣あり。布局幽逸空靈を極む。「叔英三兄先生雅正、湯祿名」の款識し、款下に湯印祿名、樂民畫印の二印、下角に曾領畧二分明月六代江山の一印を鈐せり。



### 湯祿名松蔭仕女圖立軸

高四尺五寸五分、闊一尺四寸二分、紙、本、圓窓を隔て、内に士女あり、外に巨松あり、清逸雅秀の致を極む。祿名の士女は明姿雅態、一時に秀絶すと稱せらる。此の幅を見て其の虚譽にあらざるを知る。同治己巳冬十一月望後二日、湯祿名寫と款署し、祿名印、樂民の二印を鈐せり。

### 湯祿名桐蔭仕女圖立軸

高四尺四寸八分、闊一尺七分、紙、本、梧桐の下、仕女紡絲の圖なり。面貌溫雅、容姿人を動かす。樂民湯祿名作と署款し、樂民の印を鈐せり。下に忠孝世祿之家、身行萬里半天下の二印あり。亦樂民の印なり。乃父湯貽汾は節義に殉せり。祿名が忠孝傳家を以て自ら矜り、之を印章に刻せしは是が爲なり。

### 蔣寶齡淡彩山水立軸

高三尺九寸一分 闊九寸九分

紙本

墨林今話を以て名ある蔣寶齡は、文衡山の畫を宗とし、後に錢叔美に従つて遊び、其の指授を得たりと云ふ。此の幅を見るに人物樹木は全く文氏を法させるも、惟錢叔美の筆意は絶へて尋ぬべき無し。或は未だ叔美に師事せざるの時ならんか。上に「野樹有傲態、春山無俗姿。琴東逸史寶齡」と款識し、子延の二印を鈐せり。

### 蔣寶齡設色花卉四屏幅

各幀 高四尺三寸二分 闊九寸八分

紙本

蔣寶齡が山水の外に花卉を能くせしこと、此の如きは人の多く知らざる所なり。筆致傳彩、俱に輕淡清逸を極む。每幅系くに詩を以てせり。左の如し、

#### 第一幀 芍药

惜春心緒與誰論。只合尋花挈一尊。不信孤游吾又嬾。小風細雨獨扃門。

曩見奚蒙泉芍药小幀、離披散亂中、逸趣橫生、歎爲獨絶、後見其鄉英柳邨明經一幅、似倣其蹟、亦饒跌宕之趣。

琴東逸史



第二幀 盆杜鵑

低飛小蝶去重回。野草無名花亂開。不有一枝紅躑躅。綠蔭深院更誰來。

白蓮女史方婉儀、爲兩峯山人配、工散筆花卉、此盆杜鵑圖、是其本也。琴東蔣寶齡

第三幀 折枝菊花

不分明處極分明。秋影誰云畫不成。記取冷吟山館夜。一窓風雨對孤檠。

吾邑屈宙父、嘗寫菊影一幀、乞人題詠、盛傳於時、後以告聞川陶樸石、樸石亦戲爲之、尤極

迷離隱約之致、此擬其筆。琴東蔣寶齡

第四幀 瓶梅水仙

水仙已綻玉精神。點綴寒窓景物新。更有東鄰偏好事。早梅分與一枝春。

方楞齋有歲晚清明圖、此幀畧師其筆、爲丸如淑媛夫人芳政。丁酉冬十月琴東逸史蔣寶齡

丁酉は道光十七年なり、印は子延、琴東逸史、霞老畫記、小紅雪生の四方を鈴せり。

### 蔣寶齡設色山水花卉冊

高六寸五分

闊八寸五分

紙本

計八幀

山水花卉の合冊なり。凡て設色にして、山水は董玄宰、惲南田、潘蓮巢、金冬心等を追蹤し、花

卉は邊壽民、黃小松等に倣へり。每幀、題詩題語あり。蓋し詩情畫意、兼ね到るの作なり。左に

菊に題せる六言一首を摘録す。並に其の印を對録す。蓋し其の題語を對録す。蓋し其の題語を對録す。

手栽籬菊已綻。客饋霜螯可烹。任爾滿城風雨。閉門自足秋情。

每幀款畧の下に琴東、子延、齡、等の印を鈴せり。吳雲の藏印並に翁鶴の一跋あり。

### 沈焯設色山水立軸

高三尺六寸

闊一尺四分

絹本

文徵明に倣へる設色山水なり。上に一詩を題して、曰はく

閒將遠意寫空濛。漁浦鷗沙點染中。千頃春漪孤艇去。鉤絲牽惹落花風。

倣文徵仲筆意 竹賓焯

沈焯之印、竹賓の二印を鈴せり。

桐陰畫論に沈焯の畫を評して「筆意勁峭。邱壑邃密。極めて功力を見る。惟思翁の澹宕靈秀の致に較ぶれば、殊に雅俗の同じからざるを覺ゆ」と云へるも、沈焯を將て董玄宰に較ぶるは



原に既に其の倫を失す。此の幅は固より未だ玄宰の堂奥に透徹するものに非るも。筆意鬆秀、傳色清新。亦一幅の好山水たるを失はず。

### 程庭鷺撫宋旭山水立軸

高二尺六寸三分 闊一尺四分 紙本

明の宋石門旭を臨せる山水なり。題して、曰はく

石門先生天姿敏妙、寫山水專師元六家、此幀臨唐子畏、用筆之精、幾與爭席、偶從趙晉齋明經竹庵中見之、戲撫一本、并識數語、佛頭著穢、所不辭耳

庚子冬月初旬、窮庵程庭鷺、記於古猗園

庭鷺の一印を鈴せり。庚子は道光二十年なり。此の幅は筆意清蒼、設色淡雅。洵に庭鷺の佳作なり。石門の題詩より款署に至るまで併せて之を摹録せるのみならず。更に進んで其の印記をも模鈴せり。蓋し庭鷺は鐵筆を能くし、丁黃よりして上は秦漢を追ひ。其の小松圓閣印存は現に世に行はる。石門の此の印章も亦自ら模刻せるものにして并せて珍とするに足る。

### 程庭鷺摹陳老蓮東坡像立軸

高二尺一寸 闊一尺二寸五分 紙本

所謂る東坡笠展の圖なり。惟背に貂裘を負ひ、兩手に瓶花を捧ぐる所、古來の畫像に異なり。蘇長公像、甲子暮冬陳洪綬敬寫」と摹款し程氏序伯、庭鷺摹古の二印を鈴せり。藏印四方あり。

此の圖は陳老蓮の摹本にして、設色清古、筆意高逸。能く老蓮の神趣を捕捉せり。庭鷺は嘉定の人にして、同里の先輩に明の李長蘅流芳あり。庭鷺因りて自ら蘅卿と號し、以て私淑の意を表せり。故に其の畫も亦清蒼瀟灑。長蘅に近しと稱せらる。庭鷺を評する者は其の「鸞鳳の姿を抱き、煙霞の氣を挹み、詩情畫境一に其人の如し」と謂へり。今此の幅を見て其の筆情の高雅、果して聲譽に負かざるを知る。

宋肇の漫堂書畫跋に題東坡笠展圖の一文あり。圖は此の幅と同じからざるも、亦是れ一種の笠展圖なり。文の一節に曰はく、

予家藏絹本東坡先生笠展圖、當是元人筆、其上題曰、東坡一日謁黎子雲、途中值雨、乃於農



家、假竊笠木屐、載履而歸、婦人小兒相隨爭笑、邑犬爭吠、東坡曰、笑所怪也、吠所怪也、覺坡仙瀟灑出塵之致、六百餘年後猶可想見。

庭鷺の此の圖も亦能く坡仙が瀟灑出塵の致を寫出し、人をして追憶に勝へざらしむ。

### 屠倬水墨山水

高四尺三寸二分 闊一尺七分 紙本

屠倬の山水は、奚鐵生に類し、瀟灑出塵の致あり。此の幅は淡墨を以て之を畫き、上に「黃鶴山樵筆法、琴塢屠倬」と題款し、屠倬印の一印を鈐せり。蓋の轉運を註せり。其の筆法、前人、屠倬の畫を評して曰はく「山水は沈鬱秀渾。直ちに古人を追ふ。自ら老鐵の授くる所なりと言ふも雖も、要するに其の筆墨の外。別に神解あり、天に得るもの多きに居れり」と。蓋し天分既に高く、之に加ふるに詩趣を以てす。即ち其の筆墨の時流に超越せる所以なり。

### 屠倬行書七絕詩軸

高五尺六寸一分 闊一尺四寸五分 紙本

屠倬は一代の詩宗なり。著に是程堂集あり。其の詩風骨清矯、坡谷の間に在り。詩文の旁、書畫篆刻に及び皆深造ならざるはなく。篆隸行楷、皆妙絶と稱せらる。此の幅東坡の七絶を書して、曰はく

竹外桃花三兩枝。春江水暖鴨先知。萋萋滿地蘆芽短。正是河豚欲上時。

韻山先生屬書 屠倬

屠倬之印、眞州長の二印を鈐せり。款識に云ふ所の韻山先生は東坡詩註を以て名ある王文誥なり。

### 屠倬行草七絕立軸

高四尺一寸八分 闊九寸八分 紙本

七絶一首。曰はく  
疎放都無客過存。五經籬外四通村。紅薔十丈開還落。臥讀農書不出門。

庚辰春日 潛園

屠倬、舊史氏章の二印を鈐せり。潛園は屠倬が晩年の號にして、庚辰は嘉慶二十五年なり。



苗夔行書唐詩立軸

高二尺八寸九分 闊一尺三寸五分 紙本

杜牧の「遠上寒山石徑斜。白雲深處有人家。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花」の七絶を録せり。研雲三弟政、仙路苗夔と款識し、苗夔之印、仙露、松風水月の三印を鈐せり。朱九丹の藏印あり。

苗夔は説文の大宗として名あるも、臨池の餘技に於いて亦必ずしも迂ならざるは、此の書に徴して之を知るべし。

郭尙先草行書立軸

高四尺二寸五分 闊一尺八寸四分 紙本

昔顔平原鹿脯帖、宋時在李觀察士諱家、今爲辰玉所藏、爭坐位帖在永興安師文家、安氏折居分而爲二。有堂大兄屬、郭尙先

文に曰はく

臣尙先、蘭石の二印を鈐せり。

尙先の草行は顔魯公の爭坐位帖より出て、其の晩年の作は董思翁と齊馳するに足るものあり。此の幅の如き即ち其の一なり。

郭尙先行書書論立軸

高四尺一寸七分 闊一尺四寸二分 絹本

書論一則を録せり。儀國大兄正、弟郭尙先と款識し、郭氏蘭石、臣印尙先の二印を鈐せり。絹素稍と黯きも、字字雄勁。眞に嘉道間、大名の作家たるに愧ぢず。時人の郭書を評して顔筋柳骨と稱せるもの、此の幅に就いて之を見るを得べし。

郭尙先白馬篇七古詩軸

高三尺五寸 闊一尺九寸七分 絹本

楷行書を以て七言長篇を録せり。末尾に款識して、曰はく

壬午五月有出此紈索書者、始頗用意、及中閒書到憾字、蚊螫右腕、驚掣、遂不成字、擲筆自笑、



古人奇柱作書、疾雷破柱而顔色不變者、彼何人哉。郭尙先款下に臣尙先、蘭石の二印を鈐せり。壬午は道光二年なり。

尙先の書を評する者は、其の小字行楷に精にして大に過ぐれば却て肉、骨に勝り、轉不圓、畫不足の病ありと云ふ。此の幅は方寸の行楷にして、圓潤挺秀。眞に大家の風度を見る。所謂醜泉の骨力を得て、甌塔の丰神を兼ねるもの是なり。絹素稍々黯きが如きは意とするに足らざるなり。

### 郭尙先草書帖

高六寸五分

闊七寸五分

紙本

計六葉

每葉烏絲欄十行。草書を以て書跋を録せり。末段に「甲申中秋前五日書於京邸寓齋、弟郭尙先」と款識し、尙先、蘭石の二印を鈐せり。甲申は道光四年なり。

尙先の書は梁茵林、章鉅林、少穆、則徐と相並んで當時三妙の目あり。凡そ詩文書畫を論せず。各時代を通じて各その時代の風尙あるを常とす。此の三家の如き亦筆意極めて相似たり。然れども若し之を甲乙すれば尙先を以て第一に推すべきのみ。

### 女史郭蘭祥竹石水仙小屏幅

紈扇徑八寸一分

絹本

紈扇を二分して屏幅とす。一は竹石、一は水仙。俱に設色淡雅、筆致清秀。以て案頭の清玩に供すべし。蘭祥は郭頻伽の室なり。頻伽又朱氏の女素君を娶りて中婦と爲せり。才人不羈、杜牧之、温飛卿輩の如くなるも、嶽崎亦自から愛すべし。

### 程恩澤草書四屏幅

每幅

高五尺六寸二分

闊一尺二寸八分

粉金蠟箋

世間多くは程恩澤の篆書に工なるを知りて其の行草も亦妙なるを知らざるが如し。此の四屏幅は草書にして、古人の書畫論を録せり。第一幅は若禪師の書を、第二幅は僧絲の五星二十八宿圖を、第三幅は展子虔の四載圖を、第四幅は虞永興の書を論ぜるものなり。末尾に「翰僊年兄雅鑒、丙申冬日程恩澤」と款識し、恩澤私印、榮祿大夫の二印を鈐せり。朱九丹の藏印あり。



梁章鉅詩帖

高七寸二分

闊九寸五分

紙本

計二十八頁

首頁に「退庵詩稿、梁章鉅著」と題し。末頁に「以上數十首皆遊宦時所作也、菴林稿」と款識せり。詩は各體七十六首にして道光三年に録せる所なり。章鉅は嘉慶壬戌七年の翰林なるが故、此の詩稿は其れより二十二年後の手録に係る。即ち章鉅の晩年なり。藤花吟館詩鈔に此の詩を収録せるや否やを詳にせず。他日對勘すべし。章鉅の書は歐陽詢と董其昌を兼ね亦一味の風神あり。

林則徐行書唐詩立軸

高七尺六寸

闊一尺六寸五分

紙本

唐詩七絶一首を録せり。曰はく

誰家老屋枕谿濱。十里青山半是雲。此處更無人跡到。只應啼鳥隔花聞。

碧奎六兄屬、林則徐

款下に林則徐印、讀書東觀視竹西臺の二印を鈐せり。

林則徐詩帖

高闊不同

紙本

計十四頁

林則徐は經世の人なり。慷慨憂國の士なり。清朝の澆季に當り身を挺んで國難に當る、其の意氣や壯とすべし。其の志や憐むべし。此の冊收むる所の詩十四首。胸裡鬱勃の氣發して詞章となれるもの、固より風流詩家の格を以て之を律すべからざるなり。其の一二を左に録す。

駿鳳條鸚力已逋。報恩豈復惜微軀。侍中碧血同時濺。落日空山叫鷓鴣。

頻歲孫盧更宗楊。籌防枯盡督師腸。何人八日湖湘定。百戰空翻汗似漿。

更らに營中の作一首あり。孤憤遣る無きの状態想ひ見るべし。曰はく

六代山川管領新。相公本色讀書人。過江名士知多少。低首詩家老劉輪。

每頁少穆の印を鈐せり。

祁寯藻行書立軸



高六尺七寸二分 闊一尺四寸六分 紋箋

寫藻は體仁閣大學士として、又一代の儒宗として、其の志す所は固より常に經世學問に在りて、翰墨詞章の末にあらず。然も餘事、書を工にして柳誠懸を法とし、參するに黃山谷を以てし、筆意頗る娟秀なり。此の幅は王蒙松山書屋圖の題跋を書し、末尾に「景楊二兄大人屬即正、淳南弟祁寫藻」の款識し、祁寫藻印、叔穎一字淳父の二印を鈐せり。書は朱絲欄行書五行。紙は淳化軒御製箋にして俱に麗潔喜ぶべし。

### 梅曾亮詩冊

高七寸五分 闊四寸五分 紙本 計二十四頁

古今體詩二十八首を録せり。末頁に「舊華三兄屬書舊作、輒録呈政、弟梅曾亮稿」の款識し、曾亮、伯言、柏槻山房の三印を鈐せり。朱九丹の跋及び藏印あり。先正事略に曰はく「伯言の古文は姬傳の緒を紹き、詩は天機清妙、皆同人の推服する所と爲る」と。姬傳とは姚鼐を云ふ。此の冊の詩を讀むに古今體各その風趣を異にせるも之を槩するに「清妙」の評。頗る當れるを覺ゆ。

### 周蓮雲山繞屋圖立軸

高二尺七寸七分 闊一尺三寸七分 紙本

淡彩山水なり。詩二首を題して、曰はく  
雲山繞屋樹當門。萬壑春流帶雨渾。疑是仙翁最深處。幾家鷄犬自成村。  
千林萬壑碧沈沈。不識人間車馬音。何處柴門白雲裏。小橋流水半川陰。

辛亥上巳後三日、廉叔寫於青松石室

款下に蓮叔畫印の一印を鈐せり。幅の左端に更に「檢呈子萱仁兄世大人教正、世小弟周蓮并識」の款識し、周蓮之印、廉叔詩畫の二印を鈐せり。辛亥は乾隆五十六年なり。周蓮の畫は董玄宰、文衡山を法として、新に機軸を出だせり。其の意匠の奇逸嶄新なるは此の幅に就いて之を見るべし。

### 周蓮淺絳山水立軸

高四尺五寸七分 闊一尺三分 紙本



淡赭を施せる秋景雲山の圖なり。一絶を題して、曰はく  
碧山清曉護晴嵐。綠樹經秋醉色酣。誰是丹青三昧手。爲君滿意畫江南。

道光壬寅秋九 廉叔蓮

湖東周蓮字廉叔印記の大方印を鈐せり。此の幅は道光二十二年即ち周蓮晩年の作に係り。蒼  
老古淡。新羅石濤と席を争ふに足る。

周蓮は詩文を善くし篆隸に工にして畫は山水の外、尤も墨梅に長し縦横槎枒百數十幅を累  
ぬるも相同じきもの無し。故に其の印章に「十六畫梅二十四摹金石三十寫山水」の語を刻せりこ  
云ふ。未だ之を見ざるを憾す。

### 王素春雷起蟄圖立軸

高四尺三寸九分 闊二尺一寸 紙本

春日田舎の景を寫せり。雷雨將に至らんとして、黒雲天を掩ふ。老幼十數、門前に在り。天を  
仰いで相指呼するの狀。蟄龍の起騰を看んごするもの、如し。題して曰はく  
春雷起蟄

咸豐丙辰夏六月上浣寫於邵伯埭、小某王素

款下に王小某作の一印を鈐せり。丙辰は咸豐六年にして、王素時に年六十三歳なり。

王素は生平刻意新羅山人を臨摹せり。故に其の畫は新羅の筆意饒し。此の幅の如き亦其の淵  
源する所を見るべし。鶏犬人畜描き得て殊に生色あり。

### 王素花鳥立軸

高四尺三寸四分 闊一尺一分 紙本

水墨を以て山茶花を寫し、枝上に青頭紅羽の一鳥を畫けり。款を掩ふて之を看れば宛然新羅  
山人の筆なり。題して曰はく

莫向亂紅深處立、恐教人看不分明、

「小某」署款し、王素之印の一印を鈐せり。

### 王素松蔭彈琴圖橫幀

高九寸八分 闊一尺三寸二分 絹本



清流の畔、亂松の下。一高土石上に琴を弾じ、侍童後ろに在りて假眠す。筆致澹雅、氣韻橫溢。小幀なり。雖も蓋し王素の傑作なり。張琴和古松、憶新羅筆、小某」款題し、王素の一印を鈐せり。

### 汪昉峻嶽喬松圖立軸

高五尺四分 闊二尺二寸五分 絹本

汪昉の畫は筆意、鬆秀、墨法淹潤。四王の規制を得たり。稱せらる。而かも晩年には頽唐の作多し。此の幅は汪昉五十五歳の設色山水にして、(汪昉は光緒三年七十八歳を以て歿せり) 皴染融和、氣魄鬱勃、即ち其の中年得意の作なり。上に「峻嶽喬松、甲寅首夏恭介書軒老父臺大人添籌之慶、陽湖汪昉」款題し、子方、汪昉私印の二印を鈐せり。甲寅は咸豐四年なり。

### 吳熙載花卉四屏幅

高四尺二寸三分 闊九寸八分 紙本 半六十三號

第一幀 楊柳鳴蟬、吳雲の題文二則あり、下角に熙載の一印を鈐せり。

第二幀 夾竹桃、吳雲の題文あり、下角に讓之の一印を鈐せり。

第三幀 紫藤、下角に熙載畫印の印を鈐せり。

第四幀 蠟梅、樹柏大兄屬、讓之吳熙載寫」款識し、讓之の一印を鈐せり。

皆設色にして姿致饒し。吳平齋の題跋を讀むに頗る感興を惹くに足るものあり。今其の長きを厭はず之を左に録す。第一幀題文の一に曰はく

湖邊楊柳萬千絲、著個鳴蟬在別枝、大似先生無四壁、借人一榻坐吟詩。此紀文達公題張桂巖蟬柳圖句也、記乙丑長夏、余與家讓之兄、同寓焦山沈江閣、每至晚餐、各舉數事、以助飲酒、讓之云、張桂巖與紀文達公、有連至京、必下榻文齋中、一日桂老爲人作叢柳鳴蟬圖、於千絲萬縷之中、忽出枯枝、棲一鳴蟬、振翼欲活、脫稿客至、相約出遊、文達到齋、見其墨瀋淋漓、愛賞莫釋、爰就畫筆、寫前詩於上、桂老歸來、初見甚喜、讀至後二句、疑其有酒醴不設之意、悻悻而出、即日移寓他宿、文達親詣謝過、携之而歸、遂爲親好如初。

辛巳新正二日愉庭老人追憶漫記

款上に吳雲の小印を鈐せり。

### 第一幀題文の二



蕭蕭元鬢亂於絲、猶寫生華舊日枝、露重風多傳欲盡、先生何事更題詩、讓之。相逢霜鬢各成絲、江山青山借一枝、莫嘆婆娑生意盡、尙斷搖筆賭新詩、退樓。此乙丑年與讓之合作蟬柳圖、次桂老元韻句也、由二詩觀之、似讓之句太蕭瑟、余詩雖不工、尙有興會、故並錄之。

同日又記

吳雲之印、愉庭之二印を鈴せり。

第二幀題文

設色古澹雅韻欲流、非胸有卷軸、此詣未易臻也、乙丑夏與讓之同寓焦山沈江閣、見其爲友人作桂屏四條、余愛此二幀、因別用宣城舊紙、作行草書二幅、易之、追念前事、距今已十六年矣、辛巳元旦後一日、愉庭記

吳雲私印、兩疊軒、辛巳七十一歳の三印を鈴せり。

此の題跋に依れば熙載の此の幅を書けるは嘉慶十年にして、平齋の題跋は其れより十六年後の道光元年なり。

吳熙載篆書聖教序立軸

高四尺三寸五分

闊一尺六寸

紙本

熙載の篆書は時人稱して「直ちに儕輩を凌躐し、古人に方駕せん」と云へり。此の幅は朱絲欄四行。篆書を以て聖教序の一節を録せり。曰はく

故知、蠢蠢凡愚、區區庸鄙、投其旨趣、能無疑惑者哉、然則大教之興、基兮西土、騰漢庭而皎夢、照東域而流慈

行書にて「聖教序一則、讓之吳熙載」と款識し、熙載之印、吳氏讓之の二印を鈴せり。

熙載は書畫篆刻皆妙ならざる無く。約して之を言へば篆書は鄧完白を師とし、山水は奚蒙泉に法り、石刻は漢に倣へり。趙之謙搗叔は熙載の篆刻を推重し、嘗て「浙皖兩宗可數人。丁黃鄧蔣巴胡陳。揚州尙存吳熙載。窮客南中年老大」の詩あり。但熙載の能く石刻に傑出するは、其の篆書の造詣に負ふ所少からざるのみ。

何紹基七律詩軸

高五尺九寸三分

闊一尺五寸二分

詩に曰はく



久陰障奪佳山川。長瀾四溢魚來人。物口籬口更圖口。羯淵停浪口開龍。  
闕汨入濟翻下鯨。決口盤疑是少陵。宅蘆蒼壁有垂露。照水百怪愁寒烟。  
「子貞何紹基」署款し、何印紹基、子貞の二印を鈐せり。

紹基は金石碑版の學に精し、故に其の行草は篆隸に根據して、卓然として一家を成せり。贗作頗る多きも眞鑑者之を見れば明珠魚目は自ら相亂るべからざるものあり。

### 何紹基行書立軸

高五尺八寸六分 闊一尺七寸三分 紙本

行書四行。琴銘を録せり。「何紹基」署款し、何印紹基、子貞の二印を鈐せり。  
紹基は晩年蘓臺に僑寓し、書を賣りて自ら給せり。當時率爾の書は率ね潦草の作多し。作偽者竟に摸擬到らざるなく。蹢躅字を成さざるに至る、笑ふべきなり。

### 何紹基精楷富公墓誌銘帖

高九寸四分 闊四寸四分 紙本 計九頁

烏絲格楷書六十行。册首に款して、曰はく

上元梅曾亮撰文口口道州何紹基書丹並篆蓋

鈐印無し。字は精勁絶倫。古意溢るゝが如し。紹基の書、未だ此の右に出づるものを見ず。梅曾亮の撰文と併せて天下の希珍とすべし。朱九丹の鈐印三方あり。

紹基の楷書は初め趙子昂を學び、後に顏魯公を法とせり。曾國藩は曾て評して云はく「子貞の學に五長あり。儀禮に精しきこと其の一。漢書に熟せること其の二。説文に通ぜること其の三。各體の詩を能くせること其の四。字を善くせること其の五なり。前三者は余自ら甚だ精しからざれば之を言はず。獨り子貞の書に至りては其の千古に傳はらんこと必せり」と。  
惟晩年書を賣りて自ら給するに及んで、潦草の作漸く多く。人之を以て遂に其の本領と做すに至れるも、而かも精詣絶倫なること、此の帖の如きを見れば、初めて曾氏の評論空からざるを知るべし。

### 戴熙山骨清寒圖立軸

高四尺四寸 闊一尺三寸九分 紙本

一名東坡 詩意图



寒山の下、老樹脩竹あり。茅舍數字、其間に點在せり。題して曰はく

山勢清臞林木森竦、此與大癡峰巒渾厚草木華滋、畫旨不同、然東坡云、清寒入山骨、草木盡  
堅疲、要自具一種氣象、學展氏未必非魯男子也

丁巳二月、可亭二兄屬、醇士戴熙

戴熙、醇士詩畫、但熙肯畫寬作程の三印を鈐せり。藏印一方竝に裱綾上に陳方臚の一跋あり。  
戴熙は嘉慶六年に生れ、咸豐十年六十歳を以て難に殉せり。此の圖を作れる丁巳は咸豐七年  
にして、即ち齡五十七歳なり。戴熙の畫は人其の板に失して、靈警渾脱の致無きを云ふ者あり。然れども是れ其の合作を見  
ざるが爲めののみ。清朝掉尾の大家として名聲噴々たるものあるは其の因りて來る所無かる  
べからず。今此の圖を見るに、秀峭颯爽。眞に「清寒入山骨、草木盡堅疲」の詩意を盡くせり。誰  
か之を目して板滞云ふを得ん。鄧秋枚は神州大觀に此の圖を評して云はく「昔人、王漁洋  
の詩を評して愛好と曰へり。余は因りて移して以て井東居士の畫を評す。戴畫は愛好に過ぐ  
るもの多し。此の幀の瘦竦疎峭。隨筆點染して生氣遠く出づるが若きは殊に見ること罕な  
り。戴畫は當さに此の種を推して上品とすべし」と。蓋し過譽にあらざるなり。但質鼎紛紛

廠肆に滿つ。戴熙の筆墨を求むる者は、殊に警めざるべからず。

### 戴熙空亭飛瀑圖立軸

高四尺三寸九分 闊一尺八寸一分 紙本

淡墨を以て夏景山水を寫し。一詩を題して、曰はく

山徑繚曲石齟齬。灌木蔽空接煙楚。衣薜纏藤走鼯鼠。空亭承之夏無暑。

下俯飛瀑作人語。二人不語共延佇。悠悠忽忽乃吾侶。

末尾に「己未二月畫、爲槩舫仁兄大人屬、醇士戴熙并題」と款識し、戴熙、鹿牀詩畫、且食蛤蜊の  
三印を鈐せり。己未は咸豐九年にして、戴熙時に五十九歳に當り、其の殉難の前年なり。此の  
幅は上海龐氏虛齋の舊藏にして、載せて虚齋名畫錄に在り。

戴熙嘗て自から謂ふ「石谷南田が中年の傑作には當さに北面して之に事ふべし」と。而して其  
の石谷を師とするや、極めて功力を盡せり。今その一生を通覽するに、早年には疏朗雄肆なり  
しも、晩年には神凝氣靜にして蒼老の致を極む。其の精到の處に至りては幾んど蹤迹の尋ぬ  
べきなきは此の幅に就いて之を見るべし。



戴熙行草書立軸

高四尺二寸二分 闊二尺一分 粉金箋

行草書四行。文に曰はく

子敬地黃湯帖一紙、後有秋壑印、文三橋跋謂、其祖得之龍游士紳家、衡山先生每以自隨

春字仁兄大人屬、醇士弟戴熙

戴熙、醇士の二印を鈐せり。

戴熙は四王吳惲の後繼として清朝畫苑の大宗たり。而かも其の書に至りては小字の畫題の外。之を見ること甚だ罕なり。故に人其の書を識りて其の書を知るもの少し。安んぞ知らん、戴熙は書道の造詣、畫法に優ること更に一段深きものあるを。其の楷書は柳誠懸より出て、其の行草書は宗法一ならざるも、梁山舟、王夢樓の間に在り。唯其の完好なるものは特に得易からず。

戴熙春波圖卷

高七寸三分 長三尺九寸八分 紙本 景興海峽

戴熙の山水は王石谷を師法させるも、其の皴法は別に一生面を開き來る、眞鑑者は一望して之を辨ずべし。此の卷は水墨の春景にして、一詩を題せり、曰はく

春波盪春雲。隔岸見云云。冰盡起猶嬾。風輕細不分。

試晴搖薄霧。傍晚織微曛。乘興當携侶。同來數鴨群。

丙辰新正、雨窓獨坐、寫春波圖遣興、併題。錢塘戴熙醇士

鹿牀、醇士、井東居士の三印を鈐せり。樊嘉の跋あり。丙辰は咸豐六年にして、乃ち戴熙の齡五十六歳に當る。

愛日吟廬書畫續錄に云はく「文節公は名位既に高く、氣節尤も著はる、故に世人公の書畫に於いて即ち零星斷簡も亦寶貴すべきを知る。近頃又東瀛人の喜ぶ所となる。其の幸に未だ流出せざるは値ひする所の巨にして、津を問ふべき無きが爲なり」と。東瀛未だ戴蹟の多くを有せざるは洵に然り。然れども是れ其の價の貴きが爲にあらず。惟四王吳惲の盛名を聞いて却て其の近き所の清朝掉尾の湯戴を知らざるが爲のみ。今此の一文を讀んで苦笑を禁ずる能はず。



費丹旭先哲事蹟圖四屏幅

高四尺四寸三分 闊一尺二分 金箋本

韓蘄王、陶淵明、杜子美、林和靖四家の風流韻事を圖にして、每幀題詩を録せり。人物逸雅、補景清楚。蓋し丹旭經意の作なり。題詩左の如し、

第一幀 韓蘄王湖上騎驢圖

秋風泗水沈周鼎。淚濕吳天荆棘冷。黃河北岸旌節回。信哲如城打不開。  
沿邊撤備無人守。蟻蝨塵埃生甲冑。散盡千兵只童騎。餐來斗飯空壺酒。  
西湖楊柳烟波寒。照見從前刀劍瘢。宮中孰與論頗牧。塞上寧知無范韓。  
事去英雄甘老死。此手猶能爲公起。勸人莫問故將軍。身是清涼一居士。

第二幀 陶靖節東籬采菊圖

彼哉嵇阮曹。終以明白膏。靖節固昭曠。歸來侶蓬蒿。新霜著疎柳。大風起江濤。  
東籬理黃華。意不在芳醪。白衣挈壺至。徑醉還游遨。悠然見南山。意與秋氣高。

「子苕丹旭」署款し、曉樓書畫の一印を鈴せり。

第三幀 杜工部浣花醉歸圖

尋常行處酒債。每日江頭醉歸。薄暮斜風細雨。長安一片花飛。  
百錢街頭酒價。寒驢醉裏風光。莫問鄭公門去。恐猶恨在登床。

「曉樓」署款し、農桑餘事の一印を鈴せり。

第四幀 林處士孤山放鶴圖

放鶴山人不可招。斷河殘月夜聞簫。別來欲問春消息。花落西冷第二橋。

丁酉之秋七月既望寫於一席廬 西吳費丹旭

費丹旭印、子苕の二印を鈴せり。丁酉は道光十七年なり。

費丹旭柳陰散牧圖立軸

高四尺八分 闊九寸九分 紙本

垂柳の下に、一大水牛を畫き、頑童あり前より其の角を捉へて頭に跨んごす。着想奇拔、姿態自然。現代の所謂る寫生家なる者、之を觀ば蓋し毫を投じて懽然たらん。柳陰散牧圖、道光壬



寅春三月曉樓居士費丹旭製。款題し、子苜、丹旭之印の二印を鈐せり。幅の下右角に杏花春雨江南の一印あり。壬寅は道光二十二年なり。

### 費丹旭弄笛仕女圖立軸

高三尺二寸八分 闊一尺一寸一分 紙本

皎月天に在り、木犀花盛んに開く、一女樹幹に倚りて玉笛を吹き、一女傍に坐して之を聴く。香艶妍雅、人をして神往せしむ。丹旭は改七癖の衣鉢を襲ぎて仕女を畫き、惲南田の手法に倣ひ補景の花卉を寫せりと云ふ。今此の幅を見るに兩ながら其の神韻を得たり。傍に一詩を題せり。曰はく

木樨香滿蕊宮枝。金粉樓臺夢到遲。底事夜深吹玉笛。秋情儂已細如絲。

乙巳新秋曉樓費丹旭

子苜、費丹旭書畫印の二印を鈐せり。乙巳は道光二十五年なり。

### 費餘白叢竹佳人圖立軸

高三尺六寸八分 闊一尺二寸九分 紙本

餘白の仕女は全く乃父丹旭の家學を承けて、幽靜秀媚の致を極む。以耕費餘白寫」と署款し、餘白の一印を鈐せり。

### 張熊剪蒲圖立軸

高一尺六寸四分 闊一尺一寸三分 紙本

烏巾濶衣の高士。一童を伴ひ菖蒲を栽るの圖なり。王石谷の臨本なり。上に「剪蒲圖」と題し、次に沈石田と王石谷の七絶を録せり。曰はく

蚤起茅堂賦考槃。水田新衲十分寬。呼童細剪菖蒲葉。驗取秋來白露團。白石翁句

虛亭林木勝珠槃。屋小偏宜閉戶寬。九節長年堪服食。裏輪無夢老蒲團。石谷子和

咸豐癸丑夏四月三日、臨石谷子本、併錄其題句、鴛鴦湖外史張熊

癸丑は咸豐三年にして、張熊時に五十一歳なり。子祥書畫、張熊私印、祥翁の三印を鈐せり。

張熊は最も花鳥を工にし、其の縱逸なるは周之冕に近く、其の古媚なるは王忘庵に似たり。山水は四王吳惲を力追せりと稱せらる。



張熊倣文徵明水墨山水立軸

高二尺六寸六分 闊一尺三分 絹本

樹下溪畔に二高士。琴を前にして對晤するの圖なり。樹木人物の筆意全く是れ文衡山なり。「同治九年庚子秋九月下浣倣文太史筆意於申江客舍、子祥張熊當年六十有八」此款識し、張熊私印の印を鈐せり。

張熊松鶴菊石圖立軸

高八尺八分 闊二尺二寸二分 紙本

巨松の下に、一羽の白鶴を畫き、配するに菊石を以てせり。八尺有餘の長條幅にして、墨氣煥發、筆力鼎を扛くるの概あり。此の幅を作れる辛未は同治十年にして、張熊六十九歳の時なり。張熊年を亨くること八十四。晩年滬上に寓し、皓首靡眉、筆を操りて倦まざりしこと云ふ。況んや其の古稀以前に於いておや、此の軸の如き巨作ある怪しむに足らず。崇軒先生大人雅教、辛未仲秋月鴛湖六十九叟子祥張熊」此款識し、子祥書畫の印を鈐せり。

女史鍾惠珠花卉立軸

高三尺二寸一分 闊七寸八分 紙本

鍾惠珠は張熊の室なり。此の幅は設色を以て桃花、水仙、靈茸を畫けり。閨閣の餘技、固より未だ六法の規矩を以て論ずるを得ざるも、塵氣を洗除して、清逸の致に富む。「己未季冬月上浣、心如女史鍾惠珠寫」此款識し、鍾惠珠の一印を鈐せり。

秦炳文松風礪水立軸

高四尺二寸七分 闊一尺五分 絹本

秦炳文は梅道人を學び、松樹は黃鶴山樵に倣へり。上に二句を題して、曰はく  
松風礪水天然調。抱得琴來不用彈。 辛亥暮春寫奉棣園四叔大人教正、秦炳文  
誼亭書畫之章の一印を鈐せり。辛亥は咸豐元年にして、炳文の四十九歳に當る。炳文は初め王廉州を學び、後王煙客に私淑し、遂に黃大癡梅道人を追溯せり。故に其の筆墨自然高邁を極むること此の幅の如きものあり。



秦炳文做趙大年水村圖立軸

高二尺九寸三分 闊九寸八分 紙本

渴筆淡彩を以て桃花楊柳の水村を寫し、蕭楚清澹の意を得たり。一詩を題して、曰はく十里五里桃花水。三家兩家楊柳村。最好移居圖畫裡。人間何處是僊源。

畧得趙大年水村意、炳文

誼亭染翰の一印を鈐せり。

秦炳文做北苑夏日山居圖立軸

高二尺九寸五分 闊一尺七寸六分

炳文は晩年専ら王煙客を摹し、遂に勝境に臻れり。此の圖亦其の一なり。「北苑夏日山居圖」と題し、時觀西廬老人摹本、寫奉芝舫仁兄大人雅正、研雲秦炳文」と款識せり。

秦祖永做古十二屏幅

高四尺九分九分 闊一尺三寸四分 紙本

設色做古山水十二幀、王石谷を臨摹せるものにして、功力を費す頗る大なり。

- 第一幀 維摩曉日 做郭河陽
- 第二幀 桃源春澗 做趙文敏
- 第三幀 錦峯春曉 做燕文貴
- 第四幀 湖田霽雨 做趙大年
- 第五幀 西城樓閣 做劉松年
- 第六幀 拂水晴嵐 做關同
- 第七幀 龍澗松濤 做江貫道
- 第八幀 湖橋夜月 做楊昇
- 第九幀 中峯煙寺 做李營邱
- 第十幀 星檀古檜 做趙千里
- 第十一幀 吾谷楓林 做馬文璧
- 第十二幀 書臺積雪 做王右丞



第十二幀の上に題識して、曰はく

此余同治壬戌春避居小西莊、臨石谷摹唐宋元十二大家真本、今從篋中檢出、忽忽二十四年矣、時序如流、年將周甲、功夫雖大有長進、而畫道之難、正不易窮其奧窔也、展閱之餘、用書數語以志悵。

光緒癸未新正祖永重識

印記は祖永私印、逸翁、逸翁、楞煙外史、逸道人の諸印を用ゐる。每幀題下に一乃至二印を鈐し、別に下角に桐陰館印の一印を鈐せり。

此の屏幅は同治元年の作に係り、祖永が正に壯年銳意王石谷を臨摹せる時なり。

### 秦祖永贈王學浩設色山水小幀

高一尺七寸八分

闊九寸八分

紙本

祖永中年の作なり。題識の末尾に「壬戌夏六月望前寫於西莊、菽畦三兄大人正、楞煙弟祖永」の款識し、祖永之印、楞煙外史の二印を鈐せり。壬戌は同治元年なり。

祖永の畫は必ずしも希覯にあらざるも、此の幅は王椒畦の爲に畫けるものなるに於いて特に珍賞するに足る。

### 秦祖永臨王石谷嵩山草堂圖立軸

高四尺四寸八分

闊一尺四寸八分

紙本

王石谷の寫せる盧浩然嵩山草堂圖を臨摹せるものにして、溪流亭榭に沿ふて脩竹垂楊老松古柏を寫し、江を隔て、近岡遠山を望む。境地既に幽雅。加ふるに筆墨の老蒼圓潤を以てす。蓋し祖永の傑作なり。題款に曰はく

盧浩然嵩山草堂圖

康熙丙寅春石谷子王翬臨

光緒辛巳秋八月下浣鄰煙祖永臨於佗城寓齋

祖永私印、楞煙、桐陰、鄰煙臨古之作の四印を鈐せり。

石谷の原本に朱昂之の題識あり。此の幅に其の全文を録せるも、今爰に之を省く。

辛巳は光緒七年にして、祖永が桐陰論畫を著せる前年に當る、即ち晩年の作なり。

### 曾國藩行書官箴大幅



高五尺四寸四分 闊三尺九分

紙本

大字行書を以て漢章帝詔、縣令箴、杜預自叙、顏氏家訓、陸宣公語の五格言を録せり。末尾に「省三仁弟屬書官箴、丁卯仲冬、曾國藩」の款識し、滌生、國藩之印の二印を鈴せり。

丁卯は同治六年にして、國藩が直隸總督となれる前年にして、其の歿年を隔る六年なり。

國藩が清朝一代の俊傑たるは人皆知る所なるも、其の書法の工なるに於て亦咸同間の第一人に屬するは人之を知る者少し。曾國藩日記中に左の一節あり。以て其の造詣の深きを見るべし。

作字の道、剛健婀娜、二者一を闕かば不可なり。予既に歐陽率更、李北海、黃山谷の三家を奉じて以て剛健の宗と爲し。又參するに楮河南、董思白の婀娜の致を以てす。庶幾くば體を成せる書とせんか。

### 曾國筌行書四屏幅

各 幀 高四尺三分

闊九寸八分

蠟箋

紅黃紫白の蠟箋四屏條に、古文一則を録せり。故曰滿而不溢所以長守富也」の起首より「若一

時從權亦猶未可、何況積習更行之乎」の末尾に至るまで、凡て行書十一行。第四幀に「蘭生三兄雅正、沅甫國筌」の款識し、沅甫、臣印國筌の二印を鈴せり。

### 莫友芝小篆范氏箴立軸

高四尺二寸九分

闊二尺七分

紙本

小篆書八行九十五字。整謹にして而かも古意に乏しからず。末尾に「豹岑同歲命書范氏此箴即正、弟莫友芝」の篆書小字の款識あり。友芝私印、邵亭暉叟の二印を鈴せり。

### 姚燮著色花卉立軸

高四尺八寸

闊一尺二寸六分

紙本

孫克弘の花卉を臨せり。句を題して、曰はく

漫說閒情供蟋蟀。有人倚杖讀陶詩。

二石生、臨孫雪居」の署款し、復莊書畫の二印を鈴せり。

姚燮の畫は固より其の餘技に過ぎざるも、白描の人物、寫意の花卉は盡く古法に入り。特に



畫梅は當時の第一人を以て目せらる。其の手法、尋常畫史の蹊徑を脱盡し、主として逸趣を以て勝れり。蓋し其の來る所は詩に在り。乃ち其の畫を見る者は其の詩を知らざるべからず。前人姚燮の詩を論ずる者あり。其の一二を左に掲ぐ。

陳文述曰はく、其の博大昌明は摩詰の王の如く、其の出神入化は少陵の聖の如く、其の枯寂空靈は閩仙の佛の如く、其の飄忽綿邈は太白の仙の如く。其の幽艷崛奇は昌谷の鬼の如し。君が才は斗石量るべからざるなり。後に論者あらば當に目して詩中の神を爲すべし。

蔣寶齡曰はく、騷選の英華を蘊し、杜韓の骨を具し、力めて謫仙の逸氣を運し、長吉の冥心を參し、獨り一家を成して、百代を俯視す。七律七絶の二體。兼ねて宋賢を師とし、憂憂新小を生じ、一も凡近の語無し。近今才流輩出するも、吾は恐る抗行するもの無きを。陳潮の篆書は用筆斬截にして、描畫者の比にあらずこの評あり。此の幅を見てその虚ならざるを知る。文に曰はく、

陳潮篆書立軸

高二尺一寸

闊九寸九分

紙本

陳潮の篆書は用筆斬截にして、描畫者の比にあらずこの評あり。此の幅を見てその虚ならざるを知る。文に曰はく、

船如雁鶴時度密妃、橋似牽牛能分織女、丹鳳爲群、紫柱成削。

荅堂一兄屬 陳潮

陳潮私印、字日潮之の二印を鈐せり。

彭玉麐墨梅四屏幅

各 幀 高六尺一寸六分

闊一尺四寸六分

紙本

水師の名將、彭玉麐は好んで梅花を畫き、横斜槎枒の致。當時神品を以て目せらる。此の四屏幅は水墨の梅花にして、系くに詩を以てせり。左の如し、

仙子凌波妙絶倫。疎枝偃仰玉横陳。分明釀透春消息。不是羅浮夢裏身。

身是癯僂肌是玉。珠含乳蕊粉含胎。春風暗度無人識。博得冰顏笑口開。

贊臣一兄大人雅品

雪琴彭玉麐

天教寒梅只獨僂。玉顏得雪更清妍。綃裙縞袂飄逸甚。別有丰姿出俗纏。

癸酉冬月強病腕作於秋水蘋花館

雪琴

冰清玉潤雪生香。萼綠僂人靚澹妝。俏立凌波嬌不語。晶簾半捲月昏黃。

少鶴寫



生平最薄侯封願。願與梅花過一生。惟有玉人心似鐵。始終不負歲寒盟。  
翦翦春風底事忙。爲裁雲錦製仙裳。冰肌自有清芬在。不倩薰籠爇寶香。

蓉菊主人作

款下の鈴印は彭印玉馨、青宮少保、吟香外史、雪琴、退省山人、少司馬等にして、別に兒女心腸  
英雄肝膽、困苦艱難は英雄境、激昂忼慨有烈士風、丹青寫出與君看、漢書爲下酒物梅花是知心  
人、酒酣喝月顛倒行、古之傷心人別有懷裏、等の諸印を鈴せり。

彭玉馨は同治三年、一たび官を辭して歸り。小樓を作りて、顔して退省菴と曰へり。布衣青鞋、  
樹を種へ園に灌ぎ、終焉の志あり。此の幅に「退省山人」の鈴印あるを見れば畫はその時の作  
なるが如し。

彭玉馨梅花立軸

高四尺六寸四分 闊一尺八寸七分 紙本

一幅の梅花。墨色濃淡自在。枝幹の筆力。鼎を扛ぐべし。詩を題して、云はく  
華光三昧幼冰魂。滿紙春風帶墨痕。絶似孫山亭子上。一枝斜映月黄昏。

己卯重九日強病腕作於寄蜉閣、慎甫尊兄老父臺雅品、南嶽七十二峯樵人彭玉馨  
青宮少保、彭印玉馨、神仙本是多情種、古之傷心人別有懷裏の四印を鈴せり。

耆英臨右軍大令卷

每卷 高一尺二寸五分 長二十六尺餘寸 絹本

三卷は王羲之を臨し、一卷は王獻之を臨せり。道光二十七年丁未の作にして、即ち其の廣東  
廣西總督たるの時なり。卷首に官印二方を鈴し、書後に希晉齋、耆英介春の二印を鈴せり。每  
卷、小像を卷頭に合裝し。祁寯藻其他各家の跋あり。  
耆英は公餘、臨池に親み、當時書法を以て名あり。此の四卷は其の會心の作にして、述職して  
都に入れる時。執りて以て其の交友に誇示せる所なりと云ふ。圓渾遒卓、神氣縑素に漲る。

胡駿聲仕女圖立軸

高四尺一寸一分 闊一尺二分 紙本

胡駿聲は道光、咸豐年間に於いて仕女の妙。吳中に冠たり。此の幅を見るに、風丰典雅、眞に



傳神の上乗なり。道光庚寅歲、中秋前三日、寫於望禹書屋、虞山胡駿聲、款識し、胡駿聲、芭香の二印を鈐せり。

### 吳大澂古柏圖立軸

高二尺一分 闊九寸五分 紙本

老柏一株を寫せり。下に一題あり、曰はく  
六朝故都最多古柏、自頻遭水患、僅存什一、好古者不能無忱焉、湯雨生  
清卿臨本の一印を鈐せり。即ち湯貽汾を臨摹し并せて其の題語を録せるものなり。上に「光緒戊子秋七月寄贈見山仁兄大人法家鑒正、吳大澂」の款識し、吳印大澂の一印を鈐せり。見山は楊峴にして、戊子は光緒十四年なり。  
詩塘に吳俊卿は篆書にて「古騰」の二字を題し。裱綾に楊峴、俞樾等六名家各々其の詩文を録せり。

### 吳大澂山家除夕圖立軸

高四尺六分 闊一尺三寸六分 紙本

淡彩を用ゐて邸舍人物梅竹を寫せり。上に題して、曰はく  
山家除夕無多事、挿了梅華便過年、  
歲云暮矣、杜門不出、清理畫債、所餘無幾、有檢一年中手臨畫冊卷軸、積至四十餘本、亦一快事、  
斗廬主人知我歲事清閒、屬繪是圖、忽忽報命、求速不求工也  
庚寅祀竈日窓齋吳大澂

款下に吳印大澂の一印を鈐せり。清卿は同治七年戊辰の翰林にして、此の圖を作れる庚寅は光緒十六年なり。

### 吳大澂做石谷山水小幀

高二尺六寸七分 闊九寸 紙本

王石谷が江貫道に倣へる山水を見て大澂更に之を臨せるもの即ち此の幅なり。題して、曰はく



澠水空山道、柴門老樹村、石谷做江貫道筆、歸安吳氏所藏畫冊、有此一幀、翰卿五兄喜其雄渾、屬大澂、展爲此幅、未知能彷彿萬一否  
吳大澂記  
款側に吳印大澂、窓齋の二印を鈐せり。

### 吳大澂臨古金文四屏幅

各幀 高四尺二寸九分 闊一尺五分 紙本

古金文凡て十五行。一行十三字乃至十五字。白箋紅絲欄。末尾に楷書を以て「正甫五兄大人雅鑒、吳大澂」の款識し、吳印大澂、窓齋の二印を鈐せり。  
大澂は嘗て古鼎を獲て賞愛惜かず。其文中「客」の字に據りて自ら窓齋と號せり。此の幀の鈐印に見る所即ち是なり。  
大澂が大篆を以て書せる論語孝經は學者今尙之を珍とす。此の幅の古籀文は亦尤も造詣の精を見るに足る。

### 趙之謙行書四屏幅

各幀 高四尺八寸四分 闊一尺二寸二分 紙本

古文一則を録せり。是時河間獻王有雅材の起頭より「褒揚之聲盈乎天地之間」の末文に至るまで、凡て草行書十一行、百八十一字なり。容齋六兄大人屬書、搗叔弟趙之謙の款識し、趙印之謙、長陵舊學の二印を鈐せり。  
趙之謙の書は包世臣の其の規を一にして、勁挺は之に過ぐ。是れ清朝末葉の大家として、其の書名が其の篆刻に遜らざる所以なり。搗叔の書を論ずる者、嘗て曰はく「風馳雨驟、點畫雜披、幾んど馬逸して止むる能はざるが如し。卒に之を控御し、方に危くして而して墜ちざるあるは、蓋し紐筋翻筆、一兩字を以て全行の勢を振ふが故なり」と。評し得て妙なるを覺ゆ。

### 俞樾隸書立軸

高四尺三寸 闊二尺一寸一分 紙本

隸書六行。其の文左の如し。  
是以吐納文藝、務在節宣、清和其心、條暢其氣、煩而即捨、勿使壅滯、意得則舒懷以命筆、理伏則投筆以卷懷、逍遙以鍼勞、談笑以藥倦、常弄閑於才鋒、賈餘於文勇、



「苓舫三兄大公祖雅鑒、曲園俞樾書」云款識し、白衣宰相著書遺日、先皇天語寫作俱佳の二印を鈐せり。

### 俞樾隸書四屏幅

每幀 高五尺七寸六分 闊一尺五寸五分 紙本

文に曰はく

黃帝神靈、克膺洪瑞、勒功喬岳、鑄鼎荆山、大舜巡岳、顯乎虞典、成康封禪、聞之樂緯、齊桓之霸、爰窺王跡、夷吾譎陳、拒以怪物、玉牒金樓、專在帝王

「子如三兄屬、曲園俞樾」云款題し、俞樾私印、曲園居士、先皇天語寫作俱佳の三印を鈐せり。

俞樾は咸豐七年河南學政の官を罷めて歸りてより、戸を閉ぢ客を謝して専ら著述に従ひ、傍ら詩文に及び、東瀛詩選四十四卷を選べり。是よりして邦人亦曲園の名を知らざる者無し。書を索むるもの甚だ多かりしも、率ね行草を以て之に應じ、篆隸は輕しく作らざりし云ふ。俞樾の舊邸は杭州西湖の畔に在り。山に倚りて園を作り、廻廊複道、樹石亭榭皆具はる。規模大ならざるも自ら文人の趣味を見るに足る。後人守る能はず、今や日日頽敗に歸せん云す。

惜むべきなり。

### 任薰朱畫鍾進士圖立軸

高五尺八寸四分 闊一尺七寸七分 紙本

朱墨を以て等身の鍾馗を畫けり。衣褶は銅鈎鐵線直に陳老蓮の室に入る。同治己巳五月五日午時、阜長任薰寫于鴻城客舍」云款識し、任薰之印の一印を鈐せり。

阜長は渭長熊の弟なり。兄は人物を能くし、弟は花卉を以て名あり。一時其の畫を乞ふ者門に滿ちぬ。今此の幅を見るに阜長も亦人物に妙なること其の兄渭長に遜る所無し。文墨傳統あるを見るべし。

### 張鳴珂寒松閣家書帖

高闊不同 紙本 計七八十通

鳴珂が其の子、張思に與へたる手札數十通を編して、四冊を爲せり。公東自ら各冊裱紙に「寒松閣家書」云題し、首冊に識して「光緒二十年恩兒至義甯州署、手自檢裝、重閱一過、如重踏鴻



泥也、祀竈後二日公東記云、張印鳴珂の一印を鈴せり。陸廉夫恢は嘗て鳴珂の行楷書冊に跋して、曰はく、公東自谷冊後、公東先生の書は力を顔魯國に得たり。故に魄力極めて大にして、而して洗滌極めて嚴なり。字小にして而して精神寛裕。愈々老いて愈々媚なるは正に純熟の効なり。

### 蒲華雪景山水圖

高四尺四寸五分 闊一尺四寸三分 紙本

九琴十硯齋主人、蒲作英の淡彩冬景山水なり。上に題して云はく、峭寒生野屋。大雪滿谿山。昨夜朔風起。梅花香夢閒。胥山野史蒲華印信の一印を鈴せり。蒲華は山水花卉に工にして、大屏巨幀も頃刻にして成れり云ふ。道光に生れ光緒三年に歿せり。晩年滬上に寓し、了然一身、室家の累無く、喜んで古琴を蓄へ、遇へば則ち之を購ふ。其の人既に塵外に超脱す。筆墨亦俗氣を見ざる所以なり。海上墨林に云はく作英は平素、筆墨自から矜重せず。索る者あれば輒ち應ず。亦潤金の多寡を計らず。人其の易きを以て重視せり。

ざりき。故に歿後に及びて聲價頓に増し、昔に視ぶれば數倍せり。亦是れ梅道人の流亞なり。

### 翁同龢詩文稿卷

廣狹不同 紙本 計九葉

翁同龢の詩文稿九葉を合裝せり。同龢は顔魯公を學び清朝末葉の書家、其の右に出づるものなし。而かも其の經意の作は往往にして摹倣の迹あるを免れざるも、此の冊は匆匆落筆して、却て天真流露、工を求めずして自然の工を極む。尤も尙ふべし。稿本處處に天放閑人、松禪居士、龢、翁印同龢、松禪等の鈴印あり。

### 翁同龢行書四屏幅

各幀 高五尺一分 闊一尺三寸二分 紙本

此の四屏幅は臨書なるも、其の形を摹せずして其の意を臨せり。詩に曰はく、新苗未沒鶴。老葉方翳蟬。綠渠漚麻水。白板燒松煙。笑窺有紅頰。



醉臥皆華顛。家家機杼鳴。樹樹梨棗懸。野無佩犢子。府有騎鶴仙。

觀風嶠南使。出相山東賢。渡江弔很石。過嶺酌貪泉。與君步徒倚。

望彼脩連娟。願及南枝謝。早隨北雁翮。歸來春酒凍。共看山櫻然。

次韻蘓伯固遊蜀岡送孝博奉使嶺表 壬寅七月瓶廬翁同穌臨

翁印同穌、叔平の二印を鈐せり。壬寅は光緒二十八年なり。

同穌は光緒三十年に歿せるが故、此の書は即ち其の歿前二年の作なり。同穌、原く經學の人なるも、其の書は顔李を法とし、雄厚は劉石庵を凌駕するものあり。晚年官を罷めて梵僧野老と交りてより深く禪悅に耽り。書法愈々枯勁を増し、神味一段の饒きを加へたり。

### 楊守敬草書立軸

高四尺三寸四分 闊一尺三寸四分 絹本

草書を以て詞を録せり。曰はく

蓮花水上蔭以柳線、黃鸝聲未曙、來枕上、迄夕不停形、不改江南韻語

「惺吾」署款し、楊印守敬、星吾海外之書の二印を鈐せり。

乃ち本邦來游中の作なり。

### 楊守敬行書七絕詩翰

高四尺五寸三分 闊一尺一寸二分 紙本

海上墨林に楊守敬を評して云はく「書は顔柳を以て骨を植へ、行楷は遒勁老疎、蘓黃の間に在り」云。此の幀は七絶一首を録せり。曰はく

溪戸無人谷鳥飛。石橋橫木挂禪衣。看雲日暮倚松立。野水亂鳴僧未歸。

辛亥嘉平月鄰蘓老人書于上海

楊守敬印、鄰蘓老人の二印を鈐せり。宣統辛亥は我明治四十四年に當る。即ち守敬が本邦より歸れる後なり。

### 楊守敬行草書紀遊文四屏幅

高六尺 闊六寸九分 紙本

遊山の紀遊文一節を録せり。各幀二行。末幀に「甲寅夏宜都楊守敬書京、時年七十有六」云款識



し、守敬、星吾の二印を鈐せり。  
楊守敬の嘗て我國に在るや。其の著平碑記、平帖記を日下部鳴鶴、巖谷一六等の書家に公示し、鄭氏諸碑の鈎本を與へたるのみならず、歸國後亦水野疎梅の爲に特に學書邇言を著したる如き、東國書學の大恩人たり。其の筆墨豈尊重せずして可ならんや。

### 楊伯潤淡彩山水立軸

高五尺八寸六分 闊一尺五寸五分 紙本

伯潤の山水は初め濃厚を尙びしが、中年の後、造詣漸く深きに及び、筆致平淡に歸せり。論者云はく「喬林怪石の以て其能を炫する無くして而して軟水溫山、別に遠致饒し」と。此の幅は即ち其の晩年の作なり。上に題して云はく「靜以會神、動以觀變、久之而有得焉、則如風感水而爲文泉出山而任勢、南湖老漁楊伯潤」と。南湖の一印を鈐せり。

### 那桐行書立軸

高三尺六寸四分 闊一尺三寸一分 綾本

文に曰はく

寺門外虎溪、本小澗、比年藝以輒、但若一溝、無復古趣、余勸主僧法才、去輒、使少近自然耳

琴軒那桐

東海是槎、那桐之印、琴軒の三印を鈐せり。

### 陶濬宣列朝名人畫像四屏幅

各 幀 高三尺六寸六分 闊一尺九分 紙本

陸放翁、蘓東坡、秦淮海、董思翁四家の肖像なり。光緒戊戌の作に係る。各幀題識あるも今悉く録せず。字は六朝を宗とし、勁厚にして姿致饒し。

### 陶濬宣清朝詩壇五大家畫像四屏幅

各 幀 高三尺六寸六分 闊一尺八分 紙本

王漁洋、查初白、毛西河、朱竹垞、袁隨園五家の小肖にして、各幀題識あり。光緒戊戌二十四年、任伯年の爲に作れるものなり。



潘祖蔭手札帖

高闊不同

紙本

計八十九葉

文稿二葉、詩稿一葉を除くの外、皆尺牘なり。公は金石に精しく、尤も三代鼎彝の收藏を以て名あり。故に尺牘は事金石碑版に關するもの多し。字は翁同龢に似て草率の中に古勁道逸の姿を具へ、妙趣窮り無し。蓋し近代有數の能手なり。

張度倣古山水樹石冊

各頁 高一尺四寸四分

闊一尺五分

紙本

計八頁

張度は字を叔憲又は辟非と云ひ、文齋、壹是庵主、抱蜀老人、松隱先生等の號あり。湖州長興の人にして、官は刑部郎中に至る。八分書を能くし、神意古茂。古陶文治を讀むが如く、清季書家中、惟何媛叟、紹基之と抗衡すべしと稱せらる。尤も金石學に精く、潘伯寅、陳壽卿等と俱に相討究せり。畫は其の專技にあらざるも、一たび筆を揮へば山水花卉往くとして可ならざる無かりき。此の冊は倣古の作にして、淡彩六幀。水墨二幀なり。冊を披けば蒼渾の山水あり。

り。清楚の樹石あり、書卷の氣、毫楮の間に流溢せり。畫名必ずしも重からずして高手此の如きものあり。所謂「顯晦有時」とは即ち是なるを覺ゆ。每幀の款題。左の如し。

- 第一幀 米敷文海岳庵圖 壹是庵主
  - 第二幀 劍門樵客筆意 叔憲
  - 第三幀 董華亭倣大癡法 叔憲
  - 第四幀 湘碧老人墨法 張辟非
  - 第五幀 王司農筆端金剛杵意 文齋張度
  - 第六幀 南田布衣枯木竹石 抱蜀老人作於傳璧經堂
  - 第七幀 鹿牀居士設色小景 抱蜀老人張度
  - 第八幀 倣湯雨生設色小景 張度
- 光緒十年歲在甲申冬月、倣各家八幀、爲梅橋賢表阮清鑒

何如璋行書立軸

高四尺五寸六分

闊一尺一寸一分

綾本



論書一則を録せり。「嶺南何如璋」署款し、何印如璋、子毅の二印を鈴せり。

### 鄭文焯無量樹佛圖立軸

高三尺五寸九分 闊一尺二寸四分 紙本

設色の坐佛を寫し、頗る金冬心の遺意あり。上に長題あるも、今悉く之を録せず。大鶴山人鄭文焯「と署款し、四印を鈴せり。

鄭文焯、字は小坡、號は叔問。又大鶴山人と號せり。高密の産にして、光緒元年の舉人なり。先世は關東海嶋の鎮守にして、師に従ひ關に入り、漢軍正白旗の下に隸屬せり。小坡は天姿卓越、才學富瞻、詩詞に工なり。書は漢魏を宗とし、風格遒上と稱せらる。山水を畫くに書卷の氣盎然として紙上に溢る。又篆刻を能くし、其の摹漢の作は殊に佳なり。常に蘓滬の間に往來し、革命の後は退いて家に居り。門を閉ぢて世事を聞かず。醫を行ひ、書畫を鬻ぎて自ら給し。宣統辛亥の後七年にして歿せり。

### 陸恢秋林晚翠圖立軸

高三尺五寸九分 闊一尺七寸八分 紙本

淡彩の秋景山水なり。題して曰はく

秋林晚翠、傲王叔明大意

予所見元人中叔明爲最多、大癡則眞者絕迹、雲林仲圭、一二遇焉、故就平生親暱處、融化摹擬以貽知己□

戊午二月陸恢

又曰はく

石谷傲黃鶴、有墨筆山石略加赭色者、超妙之觀、殆有所祖、特近時不多見耳、祖芬仁兄富有儲藏、洞見法外之法、敢以此就正

廉夫陸恢又識

廉夫畫印、陸恢私印、廉夫の三印を鈴せり。

陸廉夫吳俊卿は近代支那の二大家なり。而かも吾邦に在りては廉夫の名未だ賣れずして俊卿の聲譽、獨り高きは其の何故たるを知らず。廉夫今や亡し。其の遺墨亦珍重せざるべからず。

葉氏觀畫百詠に曰はく「昔人云はく南宋後の院畫は殘山騰水多く、中原を恢復するの氣象無し」と吾は謂ふ勝國の啓禎兩朝の士大夫、北宋董巨を宗尙し、往往にして用墨濃密に過ぎ、當



時天昏地黯の時代に似たり。其の徑を倪黃に取る者、李流芳邵僧彌、下文瑜、諸人の如きも亦半壁江南の氣力已に盡くるに似たり。光宣の間、惟吾友道州の何詩孫觀察は仍ほ先正の典型を守り。吳江の陸廉夫布衣は吳門全盛の時の矩矱あり。其餘は江湖の惡習、草草の率筆を以て、高古の貌を爲すもの海上に齷集し、豪商海客の金帛を肘取して、一時を掀動す。此れ亦綠林の櫂槍の如く、之を掃すれども淨うし難し」と言、矯激に似たるも、亦時弊に中らずこそず。

### 宋人刻絲群仙圖立軸

高五尺五寸

闊三尺一寸

絹本

群仙獻壽の圖なり。人物凡て十六。樹草岩坡、綠波白雲、皆備はる。製作巧緻。一見、筆畫に異ならず。宋代に於いて此の絶技あり。唯驚くべしと爲さんのみ。王弇州は言はく「高皇帝初め禁じて人間に技工を蓄ふるを得ざらしむ。一時の妙蹟永く絶ゆ。嘉靖中巧工あり。舊刻絲を得て之を思ひ一夕にして悟り。遂に能く此を作る。今人間盛んに新刻を行ひ、或は故らに揉流舊を成さしめて以て高價を索む。然れども亦辨じ難からざるなり」と。

り」と。明清の刻絲は巧細妍麗は劣らざるも、古樸は宋に及ばず。是れ鑑別の分るゝ所なり。

### 宋人刻絲花鳥圖

高一尺三寸二分

闊一尺八寸七分

芭蕉、臘梅、牡丹、小竹等の圖にして、配するに石上の小禽を以てせり。右端に子京、項叔子、樵李、項子京家珍藏、項印墨林の五印あり。左下角に一印あるも辨ずべからず。

此の刻絲畫は北宋崔白の筆なりと稱せらる。北平文華殿に收むる所の崖白の款署ある刻絲畫を見るに、其の筆意畫趣全く此の幅に同じ。即ち此の刻絲も亦崔白の筆なりと云ふは、必ずしも故無きにあらざるが如し。

### 明刻絲瓶花盆草圖立軸

高一尺六寸二分

闊一尺三寸四分

絹本

明代の刻絲畫なり。瓶裏に南天、白梅、臘椿を挿み、盆上に水仙を植ゆ。下に一鼠小壺を倒し、散亂せる瓜實を食ふの狀を寫せり。彩色沈厚。刻絲細緻。洵に藝術の絶技なり。







